

譜例 8



Ⅲ. おわりに

以上の考察からピアノ学習の間違ひは、大きく二つあることがわかる。1は、姿勢である。ピアノの演奏では、音楽を表現する上で非常に大切なことである。正しい姿勢を早く身につけておくことが望ましい。ややもすると注意の関心が演奏中心になりやすいが、演奏の土台に姿勢があることを忘れてはならない。2は、読譜の誤りである。基本とする1拍およびリズムの比率そして運指など、正確に楽譜を読んでいないことに尽きる。これらの過ちを避けるために、正確な音楽再現までの学習順序をまとめてみたい。先ず実際に音を鳴らす前に楽譜を正確に読み理解することである。効果的な練習方法は、1. 音の高低（ド、レ、ミ、あるいは変化記号など）は、ゆっくりから曲の指示の速度まで拍をとりながら音読する。2. 音の長短は符割りをし、リズム唱（1と2と、あるいはタン、タタなど）をする。3. 運指番号をマークする。これらの準備をしてから音を鳴らし練習することを習慣づける。鍵盤に触れる前に練習の目的を明確にすることは、何よりピアノの学習を効果的にするものと考ええる。



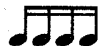
引用文献

- ・譜例1－8は、「おとなのためのバイエル教本」 ドレミ出版社 1986年

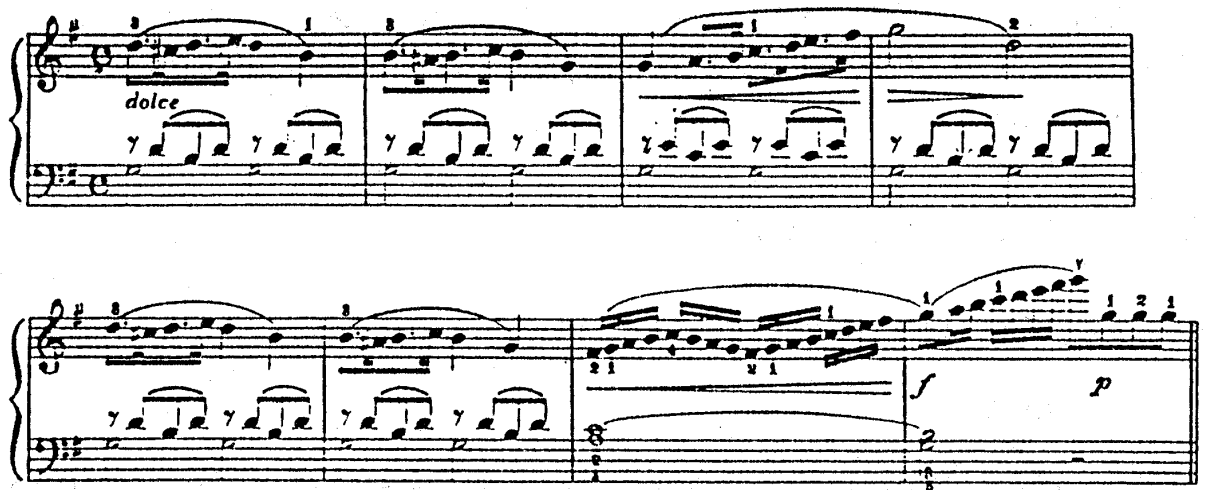
参考文献

- ・ジョセフ・レヴィーン 「ピアノ奏法の基礎」 中村菊子訳 全音楽譜出版社 1981年
- ・大野 桂 「子どもの心理とピアノの指導法」 音楽之友社 1977年
- ・ファニー・ウォーターマン 「若きピアニストへ」 石井史子訳 東京音楽社 1990年
- ・クラウディオ・ソアレス 「演奏と指導のハンドブック」 ヤマハISBN4-636-20743-2 C0073 1996年
- ・田丸信明 「バイエルの効果的な指導法」 ショパンISBN4-915994-56-2 C3073 1996年



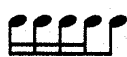
c) バイエル88番、Moderato

第1、2小節とも、右手の2回くり返すリズム  を、第2拍の16音符が左手8分音符と同時に動いてしまう。  と数えて付点8分音符と16分音符の組み合わせに慣れるとよい。基本拍は8分音符と考え、その1/2 拍と考えたほうが練習しやすい。第3小節からは、右手リズムが変わるとともに、左手の分散和音もIVに変わる。一定の速度で正確に弾けるまでは、速いテンポで弾かないように気をつけなければならない。第7小節のリズム  は遅くならないよう、しかも音が詰まったり抜けたりしないよう丁寧に指を打鍵する。第8小節は第1拍が8分音符であることに気づかせる。さらに第3、4拍の8分音符4つはリズムが詰まらないようにする。いずれも拍をしっかり数えて、速度が揺れないように心掛ける。

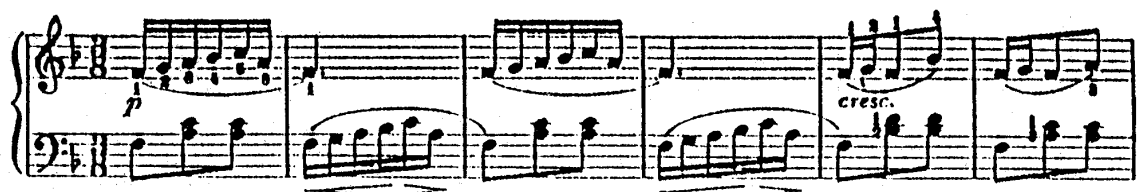
譜例 6



d) バイエル96番、Allegro

この曲は16音符  のリズムが全体をかたちづくっている。リズムが転がりやすく、一つおき (○印の音) に短くなぬように、間隔が均等になるよう自分の演奏を良く聴いて練習することが重要である。第5小節のリズム  も同様に16音符の詰まりに気をつけることと、第17小節の左手  (譜例8) でも、第5、3指が滑らないよう丁寧に打鍵することを心がける。








譜例 7



a) バイエル第48番、Allegretto

譜例 3

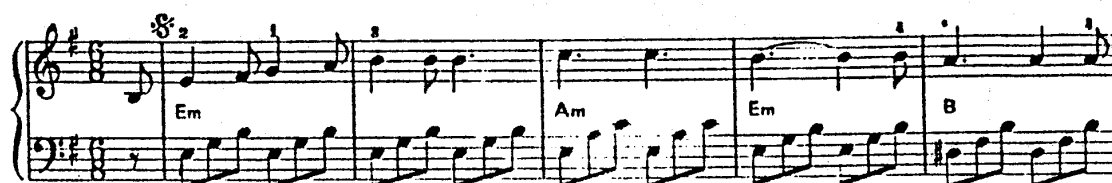




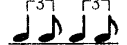
第1、2小節を弾くとき、右手8分音符dは左手4分音符第2、3拍の間に正確に入ることが出来ず、少し速く飛び出してしまうので左手eをよく聴くことが望ましい。正確なリズムを刻むには、1と2と3と声を出して数えてみると良い。また左手が右手と同じリズム  となつて、同時に動いてしまうことがある。  と  をタイで結ぶと  の長さになること、付点音符  は  とその半分  を足した長さであることを十分理解させることが必要である。

第3小節左手h.d.g.は、d.g.が4度音程なので少し指を広げる。あるいは第1指gを動かさず第5、3指を左に動かす。

b) モルダウ Die Moldau、B. スメタナ

譜例 4



6/8 拍子の、右手のリズム  が乱れないよう速度を正確に刻んで弾くとよい。途中から左手の8分音符が付点4分音符に変化する(譜例5)ので、  を1拍に刻みながら教えて弾くべきである。彼らの演奏を聴いていると  のように速くなり、2/4 拍子になってしまう。必ず8分音符を1拍に数え、4分音符を必ず2拍に正確に刻むことを守らなくてはならない。

譜例 5



譜例 2



というその場凌ぎの処理では、音楽の流れを損なうことになる。従って先程のfis から e へ移るときの場合、第1指にすることで黒鍵盤 dis を第3指で弾くことを可能にする。

2) リズムについて

まず初めに、演奏する曲が何拍子であるか確認することが大切である。彼らの演奏を聴いてみると、楽譜に書かれている音符の意味を何も考えず、ただ機械的に指を動かしているといった味気ない印象を受けることが多々ある。3拍子だから3つのアクセント、4拍子だから4つのアクセントを小節ごとにつけるだけでは情感が薄れてしまう。拍を身体で感じるようにすると、陰影のある生き生きとした音楽を表現できる。拍を理解させる方法として、音楽に合わせ肩や背中を叩くことがよくある。これはその時の振動が腕から指先へと伝わり、かえって気が急いで演奏に落ち着きがなくなる。むしろ拍子を手で叩いてとったほうが、安心して拍を合わせることが出来る。またメトロノームを使うことも1つの方法だが、一定のリズムで刻まれてしまうと曲に慣れていない場合は、途中で止まったり、テンポが揺れることがあるので適切とはいえない。拍子を手で叩く方法は、速さや強弱など応用が出来るので効果的である。

次にリズムの曖昧さや音楽の流れにむらが起きる原因を考えてみたい。一つには、楽譜に記されている音符の相対的な長さの対比が十分に理解されていない場合がある。二つには、指の動きが正確にリズムを刻むことが出来ずに起こる音の詰まりがある。これらは、演奏するリズムに対する意識が欠如しているために起こる。

練習方法としてまず初めに、楽譜をじっくり見て1小節ごとに音符の長さやリズムを確認した後、弾き始める習慣をつけるべきである。その際には無理せず非常にゆっくり、♩を1拍に数え正確に拍を刻みながら、初めから終わりまで一定の速度で弾く練習をすることが大切である。

記されている指の番号を守るよう心掛けたい。指導者は運指の指示がない場合や書かれていても弾きにくい場合、受講者に合わせた効率のよい運指を指示しなければならない。

次に彼らが運指を誤りやすい箇所について、例を挙げその原因と解決の方法とを述べてみたい。

a) 古いフランスの歌 Ancienne Chanson Francaise、P.I.チャイコフスキー、op.39-16

譜例 1

D.S. (ダル・セーニョ) ♪にもどり、Fine (フィネ) のマークで終ります。

() 内の数字は受講生がよく使う運指である。

第7小節の左手の第5指eから次の第¹/₃指V₇へ移るとき、直前まで第5指を押さえていると、それが障害となって和音がつかみにくいので、第5指をわずかに離すと弾きやすくなる。次に、第11小節の右手eを指示どおり第1指で始め、第9小節の最後hまで指を置き換えることなく引き続けると、hが第5指となり、次のcを第4指で弾くことになる。その結果第5指を倒すようにしながら第4指がその上を越えるので非常に弾きずらくなる。そこでhからcへスムーズに弾くには、第15小節の2つのcを第5指で弾くのではなく、後ろのcを必ず第3指に置き換えるとよい。

b) グリーン・スリーブス Green Sleeves、イギリス民謡

第1小節、左手dに第4指の指示があるにもかかわらず、第3指を使ってしまうのは、恐らく第4指に不安定さを感じるためと考えられる。同第4拍から第3、2、1指、の順に弾き、さらに第2小節aへ第1指を用いて移ろうとすると、僅かに音が切れてしまうことがある。また、このような運指だと速度の速い曲の場合は、連打しながら速度を保つことは難しい。指示どおり第4指から始めると、c-dが滑らかに聴え、しかも速度も変わらず指は自然に動く。

第7小節右手gから順次第4、3、2指を用いて弾くと、第4拍のdisを第3指で弾くことは難しくなる。これは後に続く音の配列を考慮していないからである。また次の音は隣の指で、

である。ピアノを弾くには、座る椅子の高さと位置を決める必要がある。身体の高さが人それぞれ違うため、姿勢も当然違ってくる。演奏しやすい姿勢は、先ず腰を安定させる。これにより上半身の動きを自由にさせる。すなわち腕に無理な力が加わらず、指は自在に鍵盤の上を動く。座る位置は、鍵盤から近すぎても遠すぎてもいけない。近すぎると肘が身体に当たり腕の動きが窮屈になり、離れすぎると腰や肩に無理な力が加わり疲れやすくなり、身体に負担がかかる。目安は椅子をピアノの中央に置き、やや浅く腰掛け、膝が鍵盤の下に少し隠れる位置が良い。受講生のなかには演奏の途中、音が高音部から低音部に移ると、腰と一緒に移動させ座り直すものを見かける。これは指の動きが緩慢になり演奏を不安定にさせ、曲の流れを損なう結果となる。安定感を保つためには、腰や脚に身体の重心をかけ脚をやや広げて座る。この姿勢が左右の動きのバランスをとり易くし、腰の浮きを解決する。

次に椅子の高さであるが、これも体格に応じて考える必要がある。プロのピアニストは身体の高さとは関係なく弾き易い高さを決めるが、初心者は基準となる目安を知っておく必要がある。弾く動作は主に上半身を使うので、エネルギーが自然に腕から指先へ注がれるよう、あらゆる奏法に適応できる姿勢が良い。肘は鍵盤より少し高め（肘の角度が120度位）に椅子の高さを設定する。そうすることで身体全体に無理がなく演奏がしやすくなる。なお椅子の高さは身体の成長に合わせ、少しずつ調整するよう心掛ける。

2. 読譜について

自分の気持ちや感情を伝える手段として主に言葉（音声）が使われる。音楽では意図された音が表現を伝える手段になる。ピアノで音楽を表現するには、楽譜に記されている記号を理解出来なければならない。例えば五線、高低を決定する音部記号、長短を決定する音符と休符など、特に各々の音符がどの鍵盤なのか、どの指を使うかなど、正確に理解しなければならない。いつまでも楽譜にドレミを書き込んでいる学生がいるが、幼児でさえ数カ月で読めるようになるのであるから、このような甘えた学習態度は改めるべきである。これらのことを覚えれば、初歩の教材の演奏は十分可能である。

さて実際の指導中に、受講生が演奏をスムーズに行えないことがある。その原因は二つあり、1は運指、2はリズムに関係している。この2つのことを中心に、いくつか受講生の演奏について指摘した改良点を例に挙げ考察したい。

1) 運指について

初心者にとって、10本の指で音楽を奏することは大変難しいことである。指の動きを滑らかにするには、指導者は音の移り変わりに対し弾きやすく合理的な運指を指示することが必要である。しかし手の大きさや指のそれは、人それぞれ異なるので運指を統一することには無理がある。さらに運指の効果は、音から音への滑らかな響きと流れ、あるいは音色にむらをつくらないことにある。またフレーズごとのまとまりを意識することも、表現の上から大切である。適切な運指を自分で決められるまでには、長い学習年数と多数の曲に習熟することが必要となる。まず楽譜に

初歩の段階におけるピアノの指導について

竹 内 アンナ

Teaching Strategies for Beginner Piano Lessons

Anna Takeuchi

I. はじめに

学校教育における音楽の授業は、鍵盤楽器(主としてピアノ)により展開されているのが現状である。ピアノを授業で用いる理由は、音楽(リズム、メロディー、ハーモニー、などの諸要素)を再現するのに最適だからである。したがって教師を志望する学生は、ピアノの実技を通して音楽の知識および音楽性を習得するのが望ましいと考える。

千葉敬愛短期大学初等教育では、「ピアノの入門」科目を開講し、小学校あるいは幼稚園での音楽の指導能力を高めることを目指している。この科目を受講する学生は、ここ10年約9割が初心者で占められている。したがってピアノの指導に際しては、基本的なテクニックと音楽の知識とを関連させ、習得させることが重要となってくる。基本的な知識およびその技術は初心者の練習を助け、進歩を決定づけると考える。これによって受講者に指導者としての自覚をうながすことを目標とする。

安易な初心者には、常に綿密な準備と慎重な練習とを心掛けさせなければならない。幸いなことに初心者のためのピアノ用教則本は多数出版されている。それら教則本の学習方法および内容はほぼ共通しているが、本受講生には、ピアノを弾くときの姿勢、音符・休符の種類、諸記号(拍子、変化、調子、強弱、速度など)、指とその番号、鍵盤と楽譜の関係、奏法上の運指を主として指導している。

本論文では、特に受講生のうちの初心者について基本となる問題点を中心として述べる。それらの問題点は、1. 姿勢、2. 読譜力(①運指、②リズム、)である。10数年のピアノの実技指導を踏まえてこの点を中心に分析し、考察した。

II. 初心者にとっての基本的な知識および奏法

1. ピアノ演奏の姿勢

ピアノの前に近づくなり、座っていきなり弾きはじめる受講生をよく見かける。これは乱暴な動作